

9班：「データの集め方と見せ方」

○藤井都百（名古屋大学）、神谷大樹（鳥取大学）、佐藤勇太（株式会社SRA東北）、杉野秀和（北陸先端科学技術大学院大学）、滝浦昌敏（明治大学）、古市康博（福井大学）

1. 議論結果の概要

9班のメンバーは国立大学4人、私立大学1人、システムベンダー1人で、大学評価、IRを扱う部署に所属しているか、大学評価やIR支援のITシステム開発に携わるなどのバックグラウンドを持つことに共通点があった。

まずは各自が日々の業務で抱えている課題について説明し、メンバー内で話題を共有した。大学内に新しく設置されたIR部署の担当者となったことをきっかけに、教学以外の内容のデータをどのように収集したらよいかや、大学が対応してきた各種外部調査で用いられているデータ定義を整理したデータカタログの作成に関して、課題を抱えていることなどが報告された。また、認証評価や自己点検評価を担当する立場からは、評価対応のために収集したデータを蓄積する方法、長期的に有効利用できる方法などについて課題意識があることや、集めたデータがあまり大学内で活用されていないのではないかと実際の業務の中で感じる場面もあることが報告された。

メンバー全員の課題が出そろった時点で、ファシリテータが課題の整理を行い、データ収集とデータ活用の方法・過程についての課題が複数のメンバーに共通することを指摘した。

続いて、ファクトブック作成や、データウェアハウスのマスターデータなど、いくつかのキーワードについてメンバーで意見交換し、議論を深めていった。この段階で、課題解決のヒントとなる可能性を持つような、他大学取組事例が他のメンバーから紹介されるなど、メンバー間の相互交流も進んだ。

午後はポスター作成に時間を費やした。まずは各自が個別課題を黄色いふせんに書き出していた。これらを机上に集め、類似の内容のふせんが塊になるように近寄せていき、その山の見出しを青いふせんに書き入れた。次に、緑のふせんに、議論の中で示された解決のためのヒントを書きこんだ。青いふせんに書かれたキーワード「定義」、「現場の理解」、「正確性」、「IRへの理解」、「データのありか」、「データ蓄積」の上位分類として「データの集め方」、「ファクトブック」の上位分類として「データの見せ方（活用）」の語をあてがい、ポスターのタイトルとした。

2. グループ討論を通して感じた評価やIRを改善に活かすためのコツ、感想等

ポスター下部の赤いふせんに書きこんだキーワードが、今回のグループ討論のまとめである。すなわち、「データは大学のもの」、「個々の部署のものではない」、「学内で取り扱うものは共有化を！」の3つである。これらは前日のプレイベントにおいても、米国の大学で共通認識とされている考え方であるとして紹介されていたことであり、データに対する学内構成員の意識を変容していくことの重要性をあらためて認識する結果となった。また、このことを実現していくためには、大学評価やIRの部署の活動への構成員の理解を深めてもらう必要があると考え、その方法については今後の課題としたい。

（文章まとめ：藤井都百）

9班

データの集め方と見せ方

問題点

解決

定義

欲しいデータと提出されたデータが一致しない

新規に必要なデータを集めるか。

必要なデータの把握ができていない

個々のデータの作成方針が曖昧

少しずつ定義が違うデータをどう集めるか

同様のデータが複数の組織に存在する。

定義が少し異なる同様のデータをどのように整理するか。

同じようなデータの提出を何度も依頼してしまう。

定義がバラバラ

定期的な調査ものに共通するデータを整理する

最低限、細かいデータ項目の形式でもらう。

IRへの理解

IRからのデータ要求にスムーズに対応してもらえるためにはどうしたらよいか。

IRとしてデータ提出を求めるが、出してくれない(誰からお願いするか)

評価関係ではデータを出してもらえないが、IRのためだとももらえない(かもしれない)

「新規」取り組みではなく、いまあるデータを「整理」している。

ファクトブック作成を通して存在をアピールする

現場の理解

個人情報の取り扱い

データ収集の目的や収集後の活用方法が明確でない

データを依頼するときの対象課から理解を得るのに手間がかかる

何のためにデータが欲しいのか+このデータを提出することで現場にどのようなメリットがあるのか
<業務との接点を明示>

収集したデータがどのように使われたのか伝える(部に還元する)

データ<権限>の責任者(組織)
※大学のもの 個々の部署のもの?

収集する目的が現場に伝わりきれていない

執行部からの依頼の意図をつかみ切れていないため、担当課にうまく説明できない

事務職員からデータを教員に依頼しても納得してもらえない

データを依頼してくる者、こちらからデータを依頼する者とのコミュニケーションを継続してとっていく

正確性

作成されたデータに疑問がある

「正しい値」が学内のどこにあるか。

データウェアハウスに蓄積された値を用いて欲しいデータをつくる

データのありか

どこに必要なデータがあるかわからない(時間がかかる)

データ作成にあたり、依頼先(部署等)がはっきりしていない(明確にされていない)

データの所在を明確する為のマップを作成する。

データ蓄積

データの管理(自動更新型DB構築)

毎年のデータ蓄積ができていない

数年前に使用するデータをどう蓄積していくか

毎年集めるデータについては定例の業務として取り込む

ファクトブック

ファクトブックを作った後どうするつもりなのか?

自大学データだけでは判断が難しい。

学内限定であればよいが、学外に出すことでマイナスとなる可能性がある。

まとめたものをどこまで見せるか、についてはっきり決まっていない

まずは試作品を執行部に見てもらいフィードバックをもらう

ファクトブックの図表は他大学の事例を参考にすることが

執行部に傾向を理解してもらい、今後の改善につなげてもらう

毎年、決まった時期に発刊。データの見方を共有する。

目標値をクリアしているか否かチェックしてもらう。

IR室の最初の仕事

データは大学のもの

個々の部署のものではない

学内で取り扱うものは共有化!